きない多岐な内容。一読してから「長崎の旅」を楽しんでみるのも一興です。一、二写真の入れ違いもあるが編集の手違いと思われる。希望を述べれば資料を満載した活字人間を喜ばせる資料編として文字の大きさ、文字のカスレが少し気になる程度。最近は色刷が多くなり高価格になる資料類の出版傾向に対し、本書のようなB五判本文一〇八頁、付録八頁のノート仕立の編集は、いかにも質実、謙虚な著者の姿を彷彿してほほえましく、資料の原点を知る体裁と言える。今さら紹介もないが著者にはシーボルトに関して小冊子『シーボルト評伝』(一九六二年刊、シーボルト先生史跡保存会)『長崎のオランダ医たち』(岩波新書、一九七五年刊)などがある。両書を書架より手に取って再読してみた。次いで本書を興味深く読ませていただいた。

(関口　忠志)

〔長崎文献社　一九八九年　B五判　本文一〇八頁　付録八頁　定価一、〇〇〇円〕

フィリップ・アリエス著、福井憲彦訳

『図説・死の文化史――人は死をどのように生きたか――』

本書は一九八四年に亡くなったアリエス Philippe Ariès が、その前年に刊行した Images de l'homme devant la mort の全訳である。フランスの心性史家アリエスについては『子供の誕生』『死と歴史』『日曜歴史家』(いずれも邦題)によってよく知られているので、経歴等の紹介は省略させていただく。彼の歴史に対する関心は、人々の日常の営みを支え動かしている心がどう変化してきたかという点に集中しているが、人間の営みの記録である歴史の中にそれを読みとることは大変むつかしいことである。歴史学は言うまでもないことであるが、よく吟味(確実信憑性の批判)した史料を操作することによって構成される必要があるが、アリエスの歴史はそこを欠いている。遺著となった本書も墓石に刻まれた図像や絵画の読解を通して、人々が死をどのようにとらえてきたかを分析したものであり、文字表現された史料を用いている部分はわずかに墓碑銘にすぎない。図像読解には歴史家の主観が入りやすく、興味に沿って読み込まれる危険性は高い。主観・想像の世界を楽しむのは歴史小説や随筆の得意とするところであるが、アリエスの歴史学はその楽しみを備えた魅惑的なものである。彼はこれまで多くの人が見過してきたこと、言及することを避けてきたことを、しかも現代の人々にとって関心の深い問題を日常感覚で平易に解き明かしてくれるだけでなく、原始古代から現代に至る一貫作業、連続した歴史をわれわれに呈示している。彼の深い洞察力によって築かれ、筋道のたてられた心性の歴史を、文字で表現された史料をもっていかに肉付けしていくかが今後に残されたわれわれの課題といえる。

さて、本書は八章から成るが、第一章「墓地と教会」では、はじめ都市の外へ排除されていた死者が次第に都市の中心に位置するようになった経過を論ずる。市外の街道筋にあった墓が三、四世紀のころよりキリスト教の聖人崇拝の影響をうけて墓地に教会

が建てられ、その教会を中心に人々が集住するようになったことによるもので、十七、八世紀までの墓地は公共空間の中心であったという。

第二章「墓碑」。墓碑は生前に特徴的であった故人の性格を死においても保持しようとする個人のアイデンティティを重視したもので、個人別の墓碑は五世紀には消え、十字架の彫刻という匿名なものにかわるが、十二世紀には上層の聖職者・平信徒において、十六世紀には一般の層においても匿名性が消失し、墓碑像・銘が復活する。これは識字能力と読書の普及に照応するものという。また刻まれた墓碑像がはじめ休息を意味する横臥の姿勢であったものが、祈禱像・肖像へと変化する過程を論ずる。

第三章「家から墓まで」。臨死の人の部屋がかつては大勢の人で一杯であったものが、中世には聖餐と終油をさずける聖職者とわずかな近親の人の立会いのみとなり、死の私化が進む一方で、簡素なものであった葬列が次第に世俗的で荘厳なものへと変化し、埋葬よりも葬送と教会でのミサに比重が置かれるようになった過程を論ずる。

第四章「あの世」。肉体から離れた魂の行方、煉獄と最後の審判を問題とする。中世に流布し、死にゆく人の心の準備を説いた「往生の術」は死生観を明らかにするものとして興味深い。

第五章「すべては空なり」。寄生虫に蝕まれた死体で表現された死が十六世紀には乾燥した骸骨で示されるようになる。そのことは骨格がもつ匿名性の故に死が個性を失なうことを意味し、同時に「死を想え」という伝統的な役割が骸骨にとってかわることによって、人々に虚無の感覚をもたらしたという。

第六章「墓地の回帰」。十七世紀末から都市ではブルジョワジー、親方職人たちが死を越えてまで自らのアイデンティティを求めて己れの履歴を記した墓をもつようになり、十九世紀には誰それの別なく遺体を積み重ねる方式をやめ、遺体と墓との一致を求めるようになった経緯を述べる。

第七章「他者の死」。かつてはいくつかの場所に封じ込められていた死が十九世紀には到る処に死が存在するようになるとともに、自らのために怖れおののく死ではなく、愛する人を奪い去る死、他者の死となったという。

第八章「そしていま」では現代のイラストやベルイマンの映画のなかに現代人の抱く死のイメージをさぐっている。

（新村　拓）

〔日本エディタースクール出版部刊　一九九〇年　菊判　四二三頁　四、八〇〇円〕

千葉保次著、澤本吉則編

『回春堂　永吉の眼科病院』

これは、回春堂、永吉の眼科病院開創二百年の記念事業の一環として出版された本である。

明治二十六年の「永吉の眼科病院」の全景を描いた銅版画の表紙カバーは暖い雰囲気で、この本を手にしたものを古き良き時代に誘うような懐しさを覚える美しい絵である。